

『和州平群郡補陀落山惣持寺縁起』翻刻・現代語訳

【凡例】

翻刻について

- ・ 改行を原本通りに施した。
 - ・ 旧字は現行字体とし、異体字は通行字体に改めた。
 - ・ 句読点と鉤括弧を任意に附した。
 - ・ 割書または小字表記される箇所を山括弧で括り、本文と同じフォントで表記した。
 - ・ 誤記と見られる箇所については、推測される本来の表記を丸括弧に入れて右に傍記した。
- 現代語訳について
- ・ 翻刻に対応する形で改行を施したが、歌謡などはその限りではない。

【翻刻】

和州平群郡補陀落山惣持寺縁起

抑当山の(蓋)監 觴を尋るに、 仁王三十二代

橘豊日天皇の太子厩戸皇子、 推古天皇

二十七年己卯春正月に、太子勅を奉り、

駕に命じて、畿内諸国の臣連等の

所建の寺地を巡検し給ふ。無地所には

地を賜ひ、并に田嶋等を賜ふ。然して、

【現代語訳】

和州平群郡補陀落山惣持寺縁起

そもそも当山の(蓋)監 觴を探り求めるに、仁王三十二代

橘豊日天皇（用明天皇）の太子厩戸皇子が、推古天皇

二十七年己卯（六一九年）春正月に勅命をいただき、

乗り物に命じて、畿内諸国の臣連等の

建立した寺地を巡検なされた。地所が無いところには

土地を賜わり、ならびに田嶋等をお与えになった。そうして、

河州科長地より斑鳩の宮に旋給ふに、
勢野の里小坂に至て、暫駕をとめて
東方の山景を見そなはし給ふに、当山
の嶺頭に独の仙人現して、笛を吹て
舞遊ふ。太子これにめて給ひて、仙人
に近付て問曰、「汝はこれ誰人そや。舞遊
ふ処の楽は何とかいふ」。仙人対曰、「此舞を
納蘇利といふ。これ国家の乱妨を静め、
更に能納利するの舞樂なり。又、我は
これ、磐余彦天皇誓願し祝ひ祭り
給ふてより後、皇孫の宝祚を護り、
天下の国民の寿福を守る真人なり。
太子、しろしめさすや。昔、人王のはしめ、
磐余彦天皇、「豊葦原の瑞穂の国は
君皇たらん」と宣ひて、始て東征し給ふ
に、大日本国鶏の長髓彦といふもの有て、
不帰順して、既に皇師に向ふ。爾時、天の
神宝を以て互に御位を争ひ、
天照太神より賜ふ天の鹿兒弓・天の羽
羽矢、及、步鞞を以て終に国家の朝敵

河内国磯長の地より斑鳩宮にお戻りになる時に、
勢野の里（現在の三郷町辺り）の小坂に至つて、少しの間、乗り物を止めて、
東方の山景をご覧になっていると、当山
の頂に一人の仙人が現れ、笛を吹いて
舞樂をなす。太子はこれに感動なさり、仙人
に近付いて尋ねて言うことには、「貴方はどなたか。舞つて
いた楽は何というのか」と。仙人が答えて言うには、「この舞を
納蘇利という。これは国家の乱れを鎮め、
更に利益を納めることができるという舞樂である。また、我は、
磐余彦天皇（神武天皇）が誓願し、祭祀
なさつて以後、皇孫の宝祚を護り、
天下の国民の寿福を守つてきた仙人である。
太子よ、ご存じないか。昔、人王の初め、
磐余彦天皇が「豊葦原の瑞穂の国の
王となるう」とおっしゃつて、始めて東征なさつた
が、大日本国に鶏の長髓彦という者がいて、
帰順せずに、ついに皇軍に立ち向かつてきた。その時、天の
神宝を用いて、互いに御位を争い、
天皇は天照大神から賜つた天の鹿兒弓・天の羽
羽矢、および、步鞞を用いて、ついに国家の朝敵

を退治し、始て樞原の宮を造り、即、
帝位めし、すなはち、椎根津彦命に国
の造をたまひ、初はつきさかの里にすむ。
後に当地に移る。然るに、天皇、椎根津
彦命に命じて宣く、「此弓箭は天下を
治る重宝、皇孫を護る宝器たり」と
て当山に蔵め、宇賀の姫神と号し、祝
祭給ふに、忽に寶石と成る。爰に、椎根
津彦命、此靈神を預りもりて、自姓を
好して四壁に椎木を愛し植^{（う）}ふ。故に、
今、其坂を椎坂といふ。然るに、彼弁財天女は、
則、我靈神なり」とて寶石をさして
曰、「此尊、威徳余尊に勝れ、誓願余聖に
超たまふ。是を信する人あらは、舞芸自
人に勝れ、或は智恵を与へ、或は無礙弁財
を与へ、或は延寿福樂を施す。故に、経に曰、
「若人在貧乏、我法修行一七日内、不滿其願
者、我誓不取正覚、若此言虚妄、我失仏種、
雖不作逆業、阿鼻城為家、經無量劫、不
得相仏（云云）」。金言有憑。何ぞ尊信せさら

を退治し、始めて樞原の宮を造り、そして
御即位なさった。そこで、椎根津彦命に国
の造の地位をお与えになった。椎根津彦命は始め、築坂の里に住んだ。
後に当地に移った。そうして、天皇は椎根津
彦命に命じて、「この弓箭は天下を
治める重宝、皇孫を護る宝器である」と
おっしゃって当山に納め、宇賀の姫神と名付けて祭
祀させなさったところ、たちまちに靈石となった。そこで、椎根
津彦命はこの靈神を預り守って、自姓に
因んで四方に椎の木を丁重に植えた。ゆえに、
今、その坂を椎坂という。そして、かの弁財天女は
つまり、我が靈神である」と語り、靈石を指して
言うには、「この靈尊は、威徳が他の靈尊に勝れ、誓願が他の靈神を
超えていらつしやる。これを信じる人がいれば、舞芸が自ずと
人に優れ、あるいは智恵を与えられ、あるいは自在の才能や福
を与えられ、あるいは延寿福樂を施される。ゆえに、経に言うには、
「もし人が貧乏であることがあつたなら、我が法を修すること七日の内に、その願を満
たそう。それが実現されなけれ
ば、我は正しい悟りを得られないと約束する。もしこの言が虚妄であれば、我は仏種を
失つて、

むや。太子、こゝをもて、上 天子より公卿・大臣に至る迄、是を崇尊したまへは、天下静謐にして玉体安全なり。大樹・諸侯より以下、士庶人に至る迄、これを敬供したまへは、弓箭の高名末代に聞え、国家豊饒にして、寿福望のごとくならん」といつて虚空に飛て失ぬ。やゝ暫く有て、ひとつの面を持来て、則、太子に与ふ。太子、此面をめして笛を吹舞たまふ。これを曾莫捨と名付。彼宝石は今、納蘇利山の坤の山(腹)にまします。今の弁財天女、是なり。然るに、彼の仙人、又、太子に語て曰、「太子、何そわれを尊信せざるや。先我を祭給は、太子子孫繁栄ならん」と。当時、太子涙を流し、歎の色を顯して生駒山をさして曰、「我子孫、終に逆臣に逢てあの山に人事あらん」と。即、謠曰、

「いのちやまたき人はよりこもしけ
くり山のくまかしの葉をかふへのか

世に逆らうことがなかつたとしても、阿鼻城を家とし、永遠に仏となることができなだらう、云々」と。この法語は頼みとすることができる。どうして信仰しないでいられようか。太子よ、これによつて、上は天子から公卿・大臣に至るまで、これを崇尊なされば、天下静謐にして玉体安穩である。將軍・諸侯より以下、武士・民衆に至るまで、これを恭敬なされば、弓箭の高名が末代にまで聞こえ、国家豊饒にして、寿福も望みのごとくなるだらう」と言つて、虚空に飛んで姿を消した。ややしばらくあつて、仙人が一つの面を持つて来て、そこで太子に与えた。太子はこの面をお付けになつて笛を吹き、舞いなさつた。これを「曾莫捨」と名付けた。あの靈石は今、納蘇利山の南西の山腹(腹)におありになる。今の弁財天女がこれである。そうして、かの仙人がまた太子に語つて言うことには、「太子よ。なぜ我を信仰しないのか。まず我をお祀りになつたならば、太子の子孫も繁栄するだらう」と。その時、太子は涙を流し、嘆きの表情を浮かべて生駒山を指して言うには、「我が子孫は、ついに逆臣に遭つて、あの山に

さらにさしそかのみこ。」

又、いかるかの宮をさして、謡曰、

「いかるかのみやのいらかにもゆる火の
ほむらの中に心はいりぬ」

と詠して暫く歎き給ふときに、

仙人の曰、「太子、歎き給ふへからず。かな

らず仏法を興(進)し、一切衆生をは

真如海に帰入せしむる方便を廻し

たまへ。真如海の中には一切衆生皆悉

法王の御子なり」といつて、忽然として

失ぬ。依之、太子、深信を催し、当山

に方二町の伽藍を構へ、堂塔を建立

し、仙人の大願を成し給ひ畢。宝塔

には大毘盧舎那如来、五智の仏を安

置し、奉為 金輪聖皇玉体安穩

には薬師如来の尊像を安置し、これ

を納蘇利薬師と号す。故いかんとなれ

は、経曰、「於一切有情、起利益安樂慈悲喜

捨平等之心、鼓樂歌讚、右邊仏像、復応

念彼如来、本願功德、乃至所樂願、一切皆遂、

逃れ入ることになるだろう」と。そこで謡うには、

「命や全き人はより怙しげくりも重栗やま 山の熊樫の葉を頭の飾りに挿しそかの御子」(天寿を全
うする人は、よりこ(父子の意か)も重栗山の熊樫の葉を頭の飾りに指す。かの御子よ)
と。

また、斑鳩の宮を指して、謡うには、

「斑鳩の宮の薨に燃ゆる火の炎の中に心は入りぬ」(斑鳩の宮の薨に燃ゆる炎の中に心
はきつと入ってゆくだろう)

と詠じて、しばらくの間お嘆きになつていと、

仙人は、「太子よ。お嘆きなさつてはならない。必

ず仏法を興隆し、一切衆生を

真如の海に帰入させる方便を巡らし

なさいませ。真如の海の中では一切衆生は皆すべて

仏の御子である」と言つて、忽然として

姿を消した。これによつて、太子は深く信心を催し、当山

に方二町の伽藍を構え、堂塔を建立

し、仙人の大願を成し遂げなされた。宝塔

には大毘盧舎那如来、五智の仏を安

置し、天皇の玉体安穩の御為

に薬師如来の尊像を安置し、これ

を「納蘇利薬師」と号した。その由来はどのようなものかという

求長寿得長寿、求富饒得富饒、求官位得官位（云云）。依之、此尊を安置し給ふ。又、国家の災孽を払はんか為には太子の本地救世観音如意輪の霊像を安置し、これを曾莫捨の観音と名付。是則、三十三身の一身、十九説法の一化なり。然るに、又、末世末代の極悪深重迷路の衆生を渡せんか為に地藏菩薩の尊像を安置し、是を閻路引導の地藏といふ。然して、補陀落山惣持寺と号し、亦是、朝護祭向院と名付く。就中、伽藍の鎮守には 天照皇太神宮・天児屋根命・武甕槌命・経津主命を勧請し給ふ。これ今の春日大明神なり。左方には悪魔降伏の為に金剛蔵王を安置し、右方には仏法擁護の為に多聞天王を勧請し、本願地主は椎根津彦命なり。傍に彼面授石あり。是を五節にまつらしめ給ふ。今に伝へ祭る。依之、伽藍をならへ、楼門・廻廊、軒をつらね、神社仏閣、

と、經に曰く、「生きとし生けるものに対して、利益・安楽・慈悲・喜捨・平等の心を起こさせる。仏を讃える音楽や唄が仏像を取り巻き、尊ぶ。さらにかの如来を念じれば、きつと本願功德から所願まで全て遂げられるだろう。長寿を求めれば長寿を得、富饒を求めれば富饒を得、官位を求めれば官位を得られるだろう、云々」と。これによって、この尊像を安置なさった。また、国家の災厄を払う為に、太子の本地、如意輪救世観音の霊像を安置し、これを「曾莫捨の観音」と名付けた。すなわち、観音の化身である三十三身の一身にして、観音の偈である十九説法の一化である。そして、また、末世末代の極悪にして深く迷いの道に入った衆生を済渡する為に地藏菩薩の尊像を安置し、これを「閻路引導の地藏」といった。そして、補陀落山惣持寺と号し、または、朝護祭向院と名付けた。とりわけ、伽藍の鎮守には、天照大神・天児屋根命・武甕槌命・経津主命を勧請なさった。この四神が今の春日大明神である。左方には悪魔降伏の為に金剛蔵王を安置し、右方には仏法擁護の為に多聞天王を勧請した。本願の地主神は椎根津彦命である。

並居て、万木高くそひへ、殿内玉をみかき、庭上もかゝやくはかりにて、誠に鎮護国家の霊場、七宝莊嚴の浄土、忽にこゝに現すといへり。其供養の日は、天皇・太子、共に行幸なりて、尊像を觀覽まし／＼て宣く、「倩、此觀自在の尊像を見るに、六臂を現し給ふ事は、六道の群類を救ひ給はんとなり。一膝を立給ふは一子の慈悲をたれて三途の苦みを悲み給ふ表示歟。經曰、「若我誓願大悲中、一人不成二世願、我隨虛妄罪過中、不還本覺捨大悲（云云）。又、藥師經曰、「得轉女成男、具丈夫相、乃至証得無上菩提（云云）。然は、朕所憑、今此二尊に過へからず。願は兩尊の本願、無謬、朕か願望を成せしめたまへ。重乞、自今以後、代々 帝王の宝祚を守り、世々 禁裏の災難を攘ひ給ひて、国民の福を守り給へ」と誓願したまひ、寺領田園三拾町を永施したまふ。その四至は、東は塩田の川を限り、南は大河を

傍にあの面授石がある。これを五節供ごとに祀らせなされた。今に伝わり、祀られている。このようなわけで、伽藍は覺を並べ、樓門・廻廊が軒を連ね、神社仏閣が立ち並んで、数多の木々が高く聳え、堂内は磨いた宝玉を散りばめたように美しく、庭も輝くほど立派で、誠に鎮護国家の霊場であり、七宝莊嚴の浄土が、忽然とここに出現したと言える。落慶供養の日に、天皇・太子がともに行幸なさり、尊像を觀覽されて、天皇がおっしゃることには、「つくづく」と、この觀自在の尊像を見るに、六本の腕を現出なさっているのは、六道の生類をお救いになろうとしてである。片方の膝を立てなさっているのは一子に慈悲を垂れて三途の苦みを悲みなさっている表れよ。經に曰く、「もし、衆生を救うという我が誓願の大悲の内、一人なりとも現世・後世の二世の願を成就させない者がいたならば、我は虚妄の罪過の内に入らして、本覺に帰ることなく、大悲を捨てることになるだろう、云々」と。また、藥師經に言うには、「女人が転生して男になり、丈夫の姿をそなえることができたならば、無上菩提の悟りに達するだろう、云々」と。それゆえ、朕が頼みとするところで、今、この二尊（納蘇利藥師と曾莫捨觀音）に勝るものはない。

限り、西は勢野の里、御祓川を限り、北は

平群の川を限る。依之、伽藍弥々繁榮にして僧宝久くさかえ、誠に仏法繁

昌の霊場也。故に参詣の諸人は深信を

催して旦暮に袖をつらね、公卿・大臣、増

信敬を加へて、祈願日々にあたらなり。こゝ

を以て、太子、歡喜まじくして自誓願し

て宣く、「当寺の住僧は毎歳年初に大

般若経を転読し、国家安全・玉体安

穩を可奉祈」と云云。又、爰に、太子つらく

当寺の地景を見たまひて、「前には大河

の流をかゝへて、秋の夕の桂月を浮へ、金

剛の月輪、不観にして観し、後には山

峯を構へて、春の朝の永日をかゝやかし、

胎藏の日輪、不念にして念之。是、実に

密教相応の霊地也。我、入滅五百歳の後、

必こゝに密乗を興する人あらん」と云云。誠に

聖言むなしからず。真雅僧正、東寺

より弘福寺に通ひ給ふ折節、中宿に

して密乗を興し給ひ、当寺僧雅円

どうか、両尊の

誓願が間違いなく遂げられ、朕の願望を成就させてください。

重ねて願うには、これより後、代々の帝王の宝祚を守

り、世々の禁裏の災難を払い除きなさつて、

国民に福をお守りください」と誓願なさつて、

寺領田園三十町を永年に施入なさつた。寺領の

四至は、東は塩田川を限り、南は大河を

限り、西は勢野の里、御祓川を限り、北は

平群の川を限る。このようなわけで、伽藍はますます繁榮

し、僧侶も久しく榮え、誠に仏法繁

昌の霊場である。よつて、参詣の諸人は深い信心を

催して朝夕に袖をつらねて続々と参る。公卿・大臣がますます

信敬の思いを強くして、祈願の靈験が日々にあたらかである。これに

よつて、太子は歡喜なさつて、自ら誓願し

ておっしゃることには、「当寺の住僧は毎歳年初に大

般若経を転読し、国家安全・玉体安

穩を祈願申し上げよ」と云々。また、そこで、太子はつくづくと

当寺の地景をご覧になって、「前には大河

の流れを抱え、秋の夕の桂月を水面に浮かべ、金

剛の月輪を観ることなく観相し、背面には山

に伝たまふと（云云）。爾後、又、笠置山解脱上人、当寺再興の時、安部山の教円上人、供養の導師として此寺に住す。それに依て、又、密教を当寺に伝ふ。于時、土御門の御宇、建永元年四月八日なり。近江国佐々木判官を檀越として再興し給ふ。ゆへいかんとなれば、佐々木本地本の願文、当寺に祈誓し奉るに、忽に感応まし／＼て所望如意。依之、伽藍再興の願主たり。此時、右の寺領を改替して三百石となす。於是、仏日二度当寺に耀き、真言秘藏、こゝに盛也。然るに、解脱房貞慶は建保（癸酉）年三月三日、於海住山入滅。春秋五十九歳。当山に塔を建立し、遺骨をおさむ。毎月三日に法事を修行す。故に、教円・貞慶の二師は当寺中興の開山と（云云）。仍て、当寺の由来、大概如此。

建保二（甲戌）年十月十八日 記之

峰が控え、春の朝の永日を輝かせ、胎藏の日輪を念ずることなく念ず。これは誠に密教相應の靈地である。私が入滅して五百年経った後、必ずここに真言密教を興す人が現れるだろう」と、云々。誠にこの言葉は空虚ではなかった。真雅僧正が東寺から弘福寺（川原寺）へ通われる折節、途中で当寺に宿り、真言密教を興しなさり、当寺の僧、雅円にお伝えなさったという。その後、また、笠置山の解脱房貞慶上人が当寺を再興した時、安部山の慶円上人が供養の導師として当寺に住した。それによって、また、密教が当寺に伝わった。時に、土御門天皇の御宇、建永元年（一二〇六）四月八日のことである。近江国の佐々木判官を檀越として再興なさった。そのゆえは、佐々木が本地本領を乞う願文を当寺に祈誓申し上げたところ、たちまちに祈りが通じなさって願いのままとなったためである。これによって、再興の願主となった。この時、右の寺領を改めて三百石とした。そこで、仏の光が二度当寺に輝き、真言秘密の教えが盛んとなった。そうして、解脱房貞慶は建保元年（一二一三）三月三日、

延宝八年庚申冬下旬、依和州
惣持寺持聖院真証法印之所
望、馳愚筆訖。

〈仁和寺真乘院〉

権僧正孝源（花押）

海住山寺において入滅した。歳は五十九歳であった。当山に塔を
建立し、遺骨を納めた。毎月三日に
法事を修した。よつて、慶円・貞慶の二師
が当寺中興の開山という。当寺の
由来はおおよそ以上のものである。

建保二年（一二一四）十月十八日 これを記す。

延宝八年（一六七三）十一月下旬、和州
惣持寺持聖院真証法印の所
望によつて、愚筆を走らせた。

〈仁和寺真乘院〉

権僧正孝源（花押）